

死んだ時に飾る物が無いからと、  
絵が得意な部下に描いてもらった  
若き日の下本地光二さん（絵）



**司令部の壊造りを指揮**  
昭和20年1月、故郷・鹿屋へまさかの赴任。配属された部隊は軍人が隊長以下6人のみで、あとは約600人の工員でした。

**僅か4日違いで海軍へ**  
旧制鹿屋中学校（現鹿屋高校）を卒業後は陸軍に入隊することになっていましたが、入隊4日前に海軍施設部に合格したため、18歳で海軍に入りました。佐世保で建築技士として勉学の傍ら、訓練をみっちり受けました。1年後には武官転用試験を受けて、下士官となりました。

工員の大半は朝鮮半島出身者で、3つの中隊に分かれ、壕造りや採石・採砂、基地滑走路の補修等に当たりました。私が中隊長として任されたのは地下壕造り。赴任当初は、これが第五航空艦隊司令部の壕になるということは知りませんでした。隊長から「シラスは崩れやすいから掘るのは難しい」と言われましたが、「私はシラス台地で育った男だから、小さい頃から扱いは慣れている」と答えたのを記憶しています。

地下壕造りは工員約200人が交代制で24時間行われる突貫工事。しかも終わりの見えない工事でした。工員は一生懸命に働いていましたが、重労働であつたため、少しずつ目標を決めて、達成したらその都度休みを入れるように心掛けました。

私たちは地下壕近くの民家を接収して寝泊りしていたのに対し、工員は郷之原の宿舎から現場を往復する毎日。工員の外出

外泊は原則禁止でしたが、独断で許可証を発行し、息抜きをさせることもありました。工員との信頼関係を保つのも、工事を進める上で大事なことでした。

**特攻隊員の言葉**  
工事がまだ半分も進んでいない頃から、第五航空艦隊司令部の機能が地上から徐々に地下壕へと移ってきて、軍人と高等女学校挺身隊員らが入りやすくなるようになりました。

地下壕の近くに三角兵舎もあり、出撃前の特攻隊員も多く見ました。彼らと言葉を交わすことはほとんど無かったのですが、ある時、名も知らぬ特攻隊員が、「この戦は勝ちっこないが、君は命を大事にして長生きしなさい」と私に言い残して、飛んでいきました。地下壕の中で涙をこらえながら、ただただ手を合わせて拝むしかありませんでした。



元海軍2等技術兵曹  
しもほんじ みつじ  
**下本地 光二**さん(91歳)

「戦争中はいろいろなことがあり過ぎた。見たくないものも見てきた。戦争は絶対にしてはならない」と語る

# 建設を指揮した地下壕の中で 死地に赴く特攻隊員に手を合わせた



第五航空艦隊司令部の地下壕内（P7に見取り図記載）  
①司令長官宇垣纏中将らが特攻作戦を計画した参謀室跡  
②電信室跡  
③戦時中に②と同じ構図で撮影された電信室の写真（昭和20年3月28日発行「写真週報第365号」）  
※地下壕は崩落する危険性があり、現在は立ち入りできません。

# 72年前の記憶

## ～第五航空艦隊司令部～

昭和20年2月10日、沖縄戦の特攻作戦の前線基地として、陸海軍の全航空部隊を統合した「第五航空艦隊司令部（司令長官・宇垣纏中将）」が海軍鹿屋航空基地に設置されました。

このような中、米軍による爆撃の避難場所として、市内には数多くの防空壕が設置され、軍事施設も次第に地上から地下へと機能が移設されていきました。

司令部においても同様、同年3月18日の空襲で鹿屋航空基地の地上の建造物が壊滅状態に陥ってから、新生町の崖の山腹に密かに掘られていた地下壕の中に徐々に移されました。以降、司令部が大分に移転する同年7月下旬まで、特攻の出撃命令はこの壕の中から発信されました。

司令長官の宇垣中将が、かつて特攻作戦の総指揮を執った地下壕。地下壕内は崩落の危険性があることから、現在は立ち入りできませんが、特攻出撃命令の舞台となったこの歴史的な地を72年前の記憶とともに探ります。

市ふるさとPR課（2階） ☎0994-31-1121